境界のない自己・同一性のない自己
――病的賭博者を通してうかがい知る自己――

滝口直子

病的（強迫的）賭博は国際的に認知された精神疾患である。この疾患は、酒や薬物など他の依存症と同様進行性であり、興奮を得るにますます大きな刺激（多額の金、多くの時間とエネルギー）を要するようになり、止めると極度のイライラ、落ち込みといった禁断症状が現われる。金を入手するために違法行為を犯すこともある。家族や仕事、社会的責任はまったくなおざりにされ、多くの人をまきこんで破滅へと走っていく。賭博者は、まさにモノにとり憑かれたかのごとく自分を失っていく。本発表では、賭博悪化の過程でいかに賭博者が自己を喪失していくか、またその自己をどう回復できるか―病的賭博は治療可能な疾患である―をみていく。

ある病的賭博者が自らの病気をこう言った。「同じことをすれば、同じ結果になる。それなのに同じことをやれば違う結果になると信じ込んで、何度も何度も同じことを繰り返す。あきれたもんだ。」病的賭博者をみているとザルという感じがする。自分の過去を振返って失敗から何かを学ぶことができないようだ。（病的賭博者には医師、弁護士といった専門分野での成功者もかなりいる。）サラ金のとりたてで自殺寸前までいっても、誰かが尻拭い（bail out）すると、また賭博を始める。瞬間、瞬間の歴史性を欠いたモノが、そこには在る。病的賭博者は、賭博を隠すためあるいは金を手に入れるため、よく嘘をつく。賭博と飲酒の依存症者A氏は、断酒には成功した。しかし賭博は止められなかった。妻もセラピストも、本人の嘘を察知し、何度も賭博を止めたか確かめた。聞かれる度にA氏はやってないと答えたが、数か月後やはり賭博をしていたのが分かった。妻とセラピストに問い詰められた時のA氏の答えはこうである。「尋ねられた時にはやってなかった。」（もっともこの問答でA氏が妻やセラピストとの関係を賭けているのは明らかだ。）病的賭博者に連続性があるとするなら、賭博の続行という連続性であろう。病的賭博者は、一週間くらいろくに食事も、入浴もせず、かろうじて生理的欲求を満たすだけで、賭博を続けることがある。この間賭博者は、時間感覚の変容やハイな気分、偉大なる自己へのアイデンティティ変容を経験することが多い。憑カレタごとく賭博にふけり、ついにはエクスタシーにいたり、目が覚めると一週間（あるいはそれ以上）経っているのである。その間の記憶はおぼろげなことが多い。

家族や恋人、友人、同僚といったまきこまれた人の苦しみはつきない。借金の尻拭いをしてはまた借金の繰り返しである。病的賭博は、賭博者本人の病気である以上に、まきこまれた人々の病気である。病的賭博者の自己（もし自己というものがあるならば）を語ることは、それ以上に大きな渦巻きにまきこまれ、共に沈んでいく共依存者あるいはインエイブラーの自己について語ることである。病的賭博者の配偶者には、同様な依存症者も多いが、殉教者の役割を担う人が多い。我慢強く、頑張り屋で信じやすく、一生懸命 bail out を続ける。病的賭博は、一人では進展しない。身近な家族、親戚、同僚といったさまざまなインエイブラーが協力しあって、症状が悪化する。借金の尻拭いのみならず、借金と

りの電話に「いない」と嘘をついたり、会社に行かない理由をかぜと嘘をついてかばうこと、賭博者のやるべき仕事を代わってやること、仕事のストレスから賭博をするのだという嘘を信じること、賭博を止めてくれとつよく懇願したりすることなども、インエイブリングであり、賭博の悪化に貢献する。

インエイブラーのなかでもことに重要なのが、共依存者である。共依存者は賭博者の「身代わり」自己といえる。賭博者は賭博に乗っ取られているのだから、その代わり社会のなかで機能を果たすのが、共依存者である。ともに沈んでいきながら、どうにか社会で生き延びられるよう、共依存者はあらゆる延命策を講じる。賭博者の自己がなくなっていると同様、共依存者も自らの自己を失い、そこには、本来なら賭博者の自己であるはずのモノ、偽の自己が、おさまっている。よく共依存者は「私は賭博者のことをみんな知っている」と信じ込んでいる。「私にだけは嘘をつかず賭博のことも話してくれる。」しかしこの完全なコミュニケーションなるものは、単なる共依存者のモノローグにすぎない。

共依存者がインエイブリングを続けざるえないのは、社会的理由もある。個人的には、「いままでやった努力やお金がいつかきっと、むくわれる」という幻想、すべてが崩壊するという恐怖、自分の力で立直らせたいという自惚れ、借金を支払うことで、カオスのなかに秩序をつくりだそうとする（失敗に帰する）試み、無力ではなく何かやれるというコントロールの錯覚、などがあげられる。社会的にもインエイブリングは奨励され、時には美談となる。賭博者の自己の中核に賭博があると同様、共依存者の自己の中核には、賭博の尻拭いがある。賭博者が違う結果を期待して、何度も何度も同じことを繰り返すと同様、共依存者も同じことを繰り返す。二人は同じ闇のなかにいるといえよう。とはいえ共依存者も人間である。身体はボロボロになり頭痛、不眠、ぜんそく、さまざまなストレス性の症状に苛まれる。ますます重くなり沈んでいく賭博者の手を、かろうじて握っている。しかしそれでも放さない。騙されているうちは、犠牲者である。騙されなくなると、今度は賭博者という他者の言動に振り回されることなく、自ら決めなくてはならなくなる。真実が分かったからといって、問題は解決できそうにもない。騙されていた方が楽である。

共依存者が握っている手を放さない限り、二人はますます泥沼に落ちていく。失踪、自殺、詐欺といったことが共依存者の頭に浮かぶ。しかし共依存者が、（神が手を差し伸べてくれることを信じ）自らの手を放すことから、賭博者をコントロールする試みを止めることから、回復は始まる。共依存者が、身代わりを止めて、自らの自己を取り戻すこと、それが賭博者の自己回復を促すことにも通じるのだ。インエイブリングがなくなれば、少なくともさまざまな問題は、賭博者自身に振りかかってくる。病的賭博も底になる時が、いつかくる。「そろそろ賭博を止めよう」と思うかもしれない。その時が、治療的介入のいい機会である。そして家族の尻拭いは賭博を悪化させるだけだが、支持は賭博者に回復の希望を与えることができる。病的賭博者は、好きで病的賭博者になったのではない。共依存者も、いつのまにか共依存のパターンにはまっていることが多い。しかし病的賭博という闇を体験することは、またとない自己回復、自己成長の機会となる。そして自己の行為の償いをし、同じように苦しんでいる同胞に自らの経験を語り、（尻拭いではなく）支持と援助をすることで、自らも成長するのである。